

創発する自己

— 自己形成の原理探求(1) —

山田 剛史

(京都大学高等教育研究開発推進センター)

Key words: 自己形成／創発／システム

筆者は自己形成という現象を捉えるべく、理論的・実証的・実践的研究を行ってきた。自己形成という用語自体は、多くの著書や論文の中で記述されているが、そこでいう自己形成とは一体どのような現象であるのか。この点については曖昧としており、何となく成長するとか発達するといったことを表す用語として用いられていることが多い。多くの心理学研究で行われているセルフハイフン研究の一環として、概念化し測定可能な状態に落とし込むことは可能かもしれない。筆者自身も実証的に自己形成の問題に切り込む際は「やむを得ず」この自己形成という豊穡な現象に限定をかけることがある。こうした研究の蓄積を大切にしながらも、一方で、自己形成という現象そのものをより原理的・理論的なレベルで掴みたい。本稿では後者の点にフォーカスを当てて検討を行う。

自己の「構造論」から「形成論」へ

自己形成論という言葉には2つの捉え方がある。「自己論」と「形成論」である。つまり、自己形成という問題を考える際、当然自己が形成されるわけだが、そこでいう自己とはそもそも何なのか、そして自己が形成されるということはどういう事象を表すのか、この2点を併せて考えなければならない。もちろん、両者を単純に区切れるものではないが、これまでの自己を扱う研究の多くは、前者に属するものであり、自己がどのような構成要素によって成り立っているのか、といった観点から行われるものが多く、少々荒っぽい言い方をすると、自己を物象化し、その構造を探求するというものであった。例えば、自己に関する研究で扱われている自己というのは、そのほとんどが意識についての意識、つまり自己意識のことであり、言い換えれば、認知された自己、自己知(self-knowledge)といった類のものである。こうしたアプローチを行う限り、変数は無限に設定可能であり、いくらでも研究は可能であろうが、おそらく積み重ねても「自己」という本質には迫ることが出来ないように思われる。

一方、後者の形成論については、十分な研究の蓄積があるとは言えない。なぜなのか。自己というそもそも曖昧で抽象度の高いものを、限定をかけた静的に捉えるならまだしも、さらにその動きを捉えようとすると、格段に難易度が上がってしまう。しかし、それでもこの困難な課題に立ち向かっていく必要があるように思う。人間が人間として生きている限り、自己は常に活動しているし、同じ状態であることなどあり得ない。自己の運動が停止した状態は死であろう。故に、自己のもつ本来の性質を捉えるためには、単にそれがどういうものかといった構造論だけでは十分ではなく、その運動によって自己はどのように自己たり得るのか、どのような姿になり得るのかといった形成論の観点から考究していく必要があると考えている。

自己形成における「主体」の位置

山田(2003)は、従来の自己形成研究において、自己形成は(認知的)志向性、つまりある目的・目標に対する態度、と同義的に位置づけられ検討されてきたが、意図せずして達せられる自己形成の営みも存在することを指摘し、両者を含めてより包括的・全体的視野から自己形成の問題を論じていくことの重要性を示唆している。

その一方で、自己を生み出す主体の問題がある。古典的な自己論のような統一的存在として自我を措定することは、現代の自己論においては既に馴染まないものになっていることが多くの研究者によって指摘されている。多元的自己や対話的自己(Hermans)といった考え方である。しかしそれでもそうした多元的自己がどのように浮上し、それとして意識され認知されるのか。この問題について問いを繰り返していても(≒現象学的還元)、何らかの自己(主体の存

在)を措定せざるを得ない。本当にそうだろうか。自己の形成の原理が自己に帰着するという論理構造(トートロジー)ではない自己形成の原理を考究していきたい。

思考の道具としてのシステム

以上、簡単ではあるが、自己形成の原理を探求していく際、自己の動的側面とそれを含む全体性を踏まえることが重要であることを指摘した。そして、それらを結びつける際の思考の道具(アナロジー)としてシステムという考え方が有用であることを先行研究の中で示してきた。ただし、システムといっても歴史の変遷の中で様々な捉え方がなされており、どのようにシステムを捉えるのかによって、議論の方向は全く異なってくる。山田(2005)は、システムを捉える次元(トップ⇄ボトム)と視点(観察者の視点⇄内部観測的視点)の観点からその質的差異化を図っており、ボトムラインの内部観測的視点により捉える重要性について指摘している。これは、河本(1995)が位置づけているシステム論の第3世代であるオートポイエーシスの考え方も重なるところである。そして、ここでは、システムを要素の集合や要素間の関係といった旧来的な捉え方ではなく、“運動(生成プロセス)のネットワーク(河本, 2006)”と捉える。

創発する自己

さらにシステム論による探求を進めるために、いくつかの概念装置を仮構する必要がある。詳細は山田(2005)で述べているが、上述したシステム論とは生成・発展の文脈が異なる、複雑系の自己組織化現象の説明原理として用いられている「創発(emergence)」というものである。そして、構成素の産出的作動およびそのネットワークに着目しているオートポイエーシス論を援用し、前述の議論と併せて、自己を形成する根本単位(構成素)として「思考」と「行為」を導出した。従来の流れからすると、前者を精神/心的システム、後者を社会システムと位置づけることも可能だが、同じではないと考えている。それぞれが構成素として生成システムを形成する。そして両者は時として構造的連関(カップリング)を引き起こし、より強度のある自己を形成する。さらにそのシステムはフラクタル構造を有し、ハイパーサイクルを形成し、運動を続ける。

これが2005年時の構想の一部であるが、「思考」という構成素に関して、まだ検討の余地があると考えている。つまり、思考と一口に言ってもその「強度」には違いがあり、思考と呼ばれる状態にある時点で既に「注意」が向けられているわけだが(「気づき」とも呼べる)、当然それ以前の状態も存在する。西田(1921)の純粹経験に近い。故に、まだ詳細な探求の余地が残されているが、現時点では、対象化以前の段階から気づき、適宜取捨選択されながら思考の強度は増し、意識としての自己を形成するといった運動が考えられる。そして、「行為」という構成素において重要な点は、行為が常に意図や自覚をもってなされているとは限らないという点である。また、行為には主として身体を媒体とした様々な活動が含まれ、それに応じた反応が付随し、経験という形で自己を形成する。

全く書き切れていないが、継続的に探求していきたい。

引用文献

- 山田剛史 2003 青年期の自己形成に関する研究の概観と展望—現象(リアリティ)理解のためのトライアングレーション— 人間科学研究, 11, 165-177.
- 山田剛史 2005 システム論的自己形成論—複雑系とオートポイエーシスの視点から— 梶田叡一編 自己意識研究の現在 2 ナカニシヤ出版 pp.183-202. (YAMADA Tsuyoshi)